五島市図書館友の会だより

第 27 号(2024 年 3 月)
発行者　五島市図書館友の会

中学校の図書室で　－心とからだの飢えを満たした空間－

14 年前のクラス会の会場へ向かうマイクロバスの中の事です。神奈川から五島に移り住み始めたばかりの 63 才の夏、幹事の熱心な勧めもあり、参加すべくふる里の天草に向かいました。
生まれ育ったのは天草の小さな島です。
小学校、中学校ひとクラス 51 名で同じ顔ぶれで、密な関係を築き成長してきました。
中学校を卒業すると高校進学は僅かで大多数は都会へ集団就職で散り散りに。クラス会もあまり開かれてきませんでした。私自身は仕事も忙しく、20 才の成人式のクラス会に参加し、二回目の参加です。
中学校以来初めて会う人もおり昔の面影を探しながら会話が弾みました。話しは中学校の昼の弁当の話になり（もちろんその頃は給食はありません）、毎日卵焼が入っていた子、梅干しやタクワンなど漬物や魚を煮たのが入っていた子などそれぞれ互いの弁当の中身を良く覚えていて、それをなかば強引に取り替えて食べた話を笑いながら話していました。
私はその話の中に入っていけません。貧しかったわが家には弁当箱さえ無く昼の弁当は持っていかなかったのです。昼の鐘が鳴ると渡り廊下を通って別棟の図書室へ行き、ひとり本を読んで昼の時間が過ぎ去るのを待ちました。そのうち、わくわくする本に出会うとなぜか空腹感を忘れ、慌てて午後の授業を受ける為、教室に向かいました。
小学校 1 年生の時、父は借金と 7 人の子供を母に残し 48 才で病死しました。
大きな兄姉は中学校を卒業すると島を出て働きに出、すぐ上の兄と私、3 才の弟、1 才の妹が家に残りました。海岸のすぐ近くで家と言ってもひと間だけの小屋みたいなところに住んでいて、台風の度、家は傾き土間は海水に浸かるありさま。兄弟姉妹並んで寝るのですが一番外側に寝る誰かが土間か縁側に落ちる始末。
母は父が亡くなっても泣く暇もなく妹を背にくくり畑仕事、日雇いの仕事をし子供を養う為、働き詰めでした
そういう私たち家族をみかねた遠い親類が私を預かる事になりひとり娘のいる肥料屋を営む家に住むことになりました。食べ物も豊富にあり、その頃見たこともなかったチョコレートやパイナップルのおやつ、自分だけの布団の中で寝るのです。
着るものや履物は新しい物ではなくひとり娘からのお下がりですけどこざっぱりとしていました。最初の頃は満足してましたが、だんだん母が恋しくなったのか頻繁に家に戻り、その度に返されました。そのうちに「なんで私だけ！」と他の兄弟姉妹の中で私だけ家から追い出されたと思い、怒り

に変わり、小学校６年の修学旅行の帰り、まっすぐ家に帰りました。母は黙っていましたが後で親類の家に謝りに行ったそうです。貧しくとも母や家族の傍が良かったのだと思います。
人ひとり育てるのがどんなに大変か後で大人になってから嫌というほどわかる事になるのですがその頃はわからず、やみくもに母に反抗していました。
帰ったものの貧乏は変わらず、昼の弁当が無いのは仕方ないとあきらめていていました。なぜか弁当が無いのをクラスメイトに知られるのが嫌でそーっと教室を出た覚えがあります。
小さな部屋ですが入り口に「御所浦北中学校図書室」と書いてあり本棚には日本文学、世界文学集、野口英世や二宮尊徳、キューリ夫人などの伝記ものがありました。100 冊あったかどうか、そんなに多くはありませんでした。昼は椅子に座り、片っ端から読み２年生の頃にはほぼ読んでしまいました。そこで国語の先生の愛読書を借りて読みました。国語の先生は太宰治や井伏鱒二、谷崎潤一郎など背伸びして読みました
太宰治の『斜陽』や『人間失格』など本当に分かっていたのか、今、思えば怪しいものですがその頃はひそかに太宰治像を作り上げふくらませ、憧れの存在になりました。
今、思えば少ない本の数でしたが私の空腹を忘れさせ母に対しての愛の飢えを受け止めてくれた図書室でした。そして、本が差別やどんな境遇にいても努力して求めていけば夢は叶うかもと思わせてくれました。
その図書室から始まった私のそばにはいつも本があり私の心の栄養になり、整え、生きる知恵と勇気を与えてくれました。
昨年、五島には素晴らしい図書館がオープンし親子連れや受験生が多く見られるようになったと思います。感受性豊かな若い人達がどんな本に出会うのだろうと思うと嬉しくなります。
図書館や本屋さんで本を手に取りパラパラとページをめくる時のドキドキ、ワクワク感はあの中学校の図書室で感じた気持ちと変わらず、私の幸せの瞬間です。
この文を書くためにクラスメートの３人に図書室がどこにあったか電話で聞きましたが、誰も図書室がどこにあったか、そもそも図書室ってあったの？と聞く始末。それよりも私が弁当を持って行かなかったことに驚いていました。良かった。誰にも気づかれていなかったと、ホッとしました。

リレーエッセイ 25　　尾宮　スミ子

蘭子さんのおすすめ絵本　絵本は一生の友達です

その 12

『かえるのごほうび』

木島　始・梶山 俊夫 レイアウト

この絵本は一つの文字もない「鳥獣人物戯画」をかえるのごほうびと題した一つの物語に組みなおして作り上げたものです。
相撲大会で勝ってごほうびを手にしたかえるが突然死んでしまいます。猿のお坊さんをよんでお葬式がはじまります。
供養にお供えしたほうびは全部猿のおぼうさんの物になってしまいますが、実は・・・・・

現在、鳥獣戯画は小学六年生の教科書で扱っているそうです。なかなか本物を見る機会がないのでこの絵本を手に取って、日本のこの素晴らしい美術を、と同時に漫画の起源ともいわれているこの画のおもしろさや生き生きとした鳥獣たちの動きを是非とも子供達と一緒に楽しんでいただきたいと思います。

『いろいろへんないろのはじまり』

アーノルド・ローベル・まきたまつこ

皆さんは色の三原色の事はもちろんご存じですよね。青、黄色、そして赤です。
ずっとむかし灰色とほんの少しの黒と白の世界に住んでいた魔法使いが、ある日、魔法の薬をちょっとずつ混ぜ合わせると妙なものができあがりました。それが青色です。近所の人が欲しがり、そこら中青、青の世界に。ところが青の世界にいると悲しくなってきます。すっかり笑顔が亡くなってしまいます。これは良くないとまたあれこれ混ぜるとできあがったのが黄色。
そこで中黄色の世界に。でもみんなの目がチカチカと痛くなります。それではと作ったのが赤。赤の世界。でもちっともよくありません。みんなイライラして起こりっぽくなってしまいます。それで魔法使いが作ったのが・・・・。
絵本は絵と文が一つになって楽しめるものが良いとよく言われますが、この絵本は、その最たるものと言えるでしょう。

図書館友の会会員　武藤　蘭子

アートの広場（エントランスホール）　展示紹介

「赤尾　誠展」　R5 年 12 月

「第 11 回しおりコンクール展」

R6 年 2/11～3/3

「降田達季展」

前期：R6 年 2/11～3/3
後期：R6 年 3/6～3/30

ある日の読書会

・開催日・R6 年 2 月 14 日　　・参加者・４名
・テーマ・今まで読んだ本で泣いた、または悲しかった本
・『立春大吉』浅尾 大輔著
　病院の閉鎖に対する老人の物語／一つ一つの言葉に重みがある／自宅で最後まで生きたい
・『エデンの東』ジョン・スタインベック著
　カリフォルニアに移民した親子三代の物語／一日一冊、読んだ／一気に読んだ
・『あのころはフィードリヒがいた』ハンス・ペーター・リヒター著
　ナチス時代の２家族を丁寧につづっている／最後の最後に涙した

例会のご案内
新聞切り抜きの掲示や、図書整理など簡単な作業をします
とき：３月２４日（日）１０時～
ところ：図書館ボランティア室
毎月、最終日曜日、作業を兼ねて集まります。

第 30 回読書会
- **どなたでも参加できます**
- **とき； ５月１５日（水）１０時～**
- **ところ：図書館ボランティア室**
- **課題本：予定『君たちはどう生きるか』**
  吉野　源三郎著
  図書館で用意します。

編集後記
　新図書館がオープンしてまもなく一年となります。皆さん、図書館を利用されていますか？
家でも施設でも利用すればこそ、「活きて、生きて」きます。
お気に入りの一冊が見つかるかも知れません。「われらの図書館」をもっともっと楽しみましょう！

K・S